

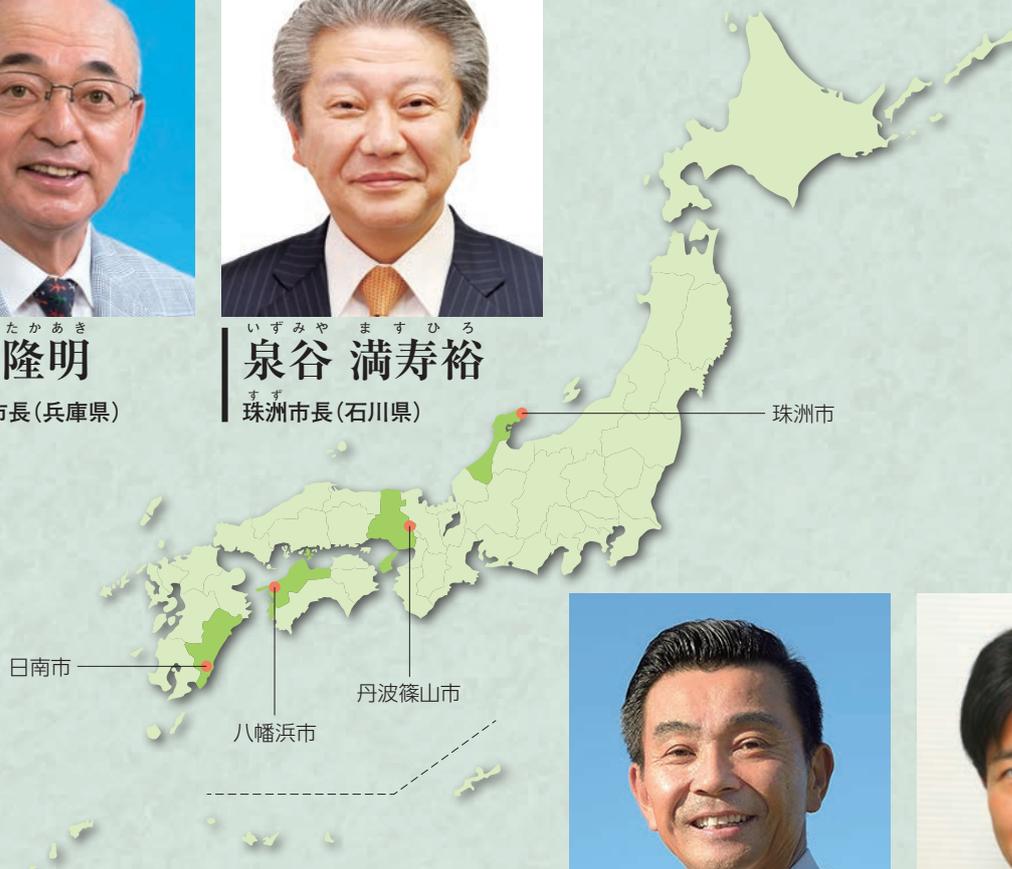
# 「農業遺産」の保全・活用を通じた地域振興



さかい たかあき  
**酒井 隆明**  
たんばさきやま  
丹波篠山市長(兵庫県)



いずみやますひろ  
**泉谷 満寿裕**  
すず  
珠洲市長(石川県)



日南市 丹波篠山市 八幡浜市



たかはし とおる  
**高橋 透**  
にちなん  
日南市長(宮崎県)



おおしろ いちろう  
**大城 一郎**  
やわたはま  
八幡浜市長(愛媛県)

司会・コーディネーター

ほその すけひろ  
**細野 助博**

中央大学名誉教授

社会や環境に適応しながら何世代にもわたり継承されてきた独自性のある農林水産業や、それに関わる文化、ランドスケープなどを保全・活用する地域を認定する「農業遺産」。平成14年に国連食糧農業機関が認定する「世界農業遺産」が始まり、平成28年にはその国内版として、農林水産大臣が認定する「日本農業遺産」が開始されました。令和3年11月現在、世界農業遺産は国内では11地域、日本農業遺産は22地域が認定されています。

座談会では、世界農業遺産・日本農業遺産の認定を受け、保全・活用の取り組みを進める泉谷・珠洲市長、酒井・丹波篠山市長、大城・八幡浜市長、高橋・日南市長にお集まりいただき、それぞれの農業遺産の特徴や次世代に引き継ぐための取り組み、環境保全に対する考え方などについて幅広くお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)



泉谷 満寿裕  
珠洲市長(石川県)

「世界農業遺産」×「SDGs」×  
「アート」のまちづくりを展開し  
地域の総合力を高めて  
いきたいですね。

### それぞれの農業遺産の歴史と特徴

**細野** 本日は、世界共通認識でもあるSDGsとの関連も踏まえて、将来に受け継がれるべき重要な農林水産業システムを保全・活用する地域として、世界農業遺産・日本農業遺産に認定された都市の市長にお集まりいただきました。

それでは、各都市の農業遺産の歴史や特徴、まちづくりへの活用策についてお聞かせください。

**泉谷** 珠洲市を含む能登地域は、里山里海の原風景を色濃く残した地域です。国内で唯一この地域にのみ残る「揚げ浜式」と呼ばれる製塩法など、特徴的な伝統文化やなりわいなどが地域に受け継がれており、平成23年、「能登の里山里海」が世界農業遺産の国内第1号として認定されました。

珠洲市は能登半島の最先端に位置しており、人口減少が最大の課題です。市内に高等教育機関がないため、地域に若い世代が定着しにくいことも影響し、現在の人口は昭和29年の市制施行時に比べて、3分の1強まで減少してしまいました。

その対策として、世界農業遺産の認定前から、金沢大学と連携して進めてきたのが、里山里海を生かした人材育成事業です。廃校となった空き校舎を活用して金沢大学が開設した「能登学舎」で、平成19年から協働でプログラムを進め、これまでの修了生は205名。能登の里山里海を世界に発信し、同時に地域の課題解決に取り組む人材を育ててきました。

このような人材育成事業を進めている中で、世界農業遺産の認定でしたから、非常に流れが良かったですね。能登の里山里海の素晴らしさにより光が当たり、地域のブランド化にもつながりました。珠洲市としても、こうした地域資源や、育成した人材をうまく生かしながら、地域振興に向けた仕組みづくりを進めているところとです。

**酒井** 丹波篠山市は大阪市、京都市、神戸市から車で約1時間の近距離にありながら、昔から



「奥能登国際芸術祭2020+」の目玉展示の一つとして注目された「スズ・シアター・ミュージアム」(珠洲市)

農業が盛んな土地柄で、農村の原風景が残っているまちです。特におせち料理でおなじみの黒豆(黒大豆)の産地として有名で、近年は完熟前に収穫する黒枝豆も人気が出ています。令和3年2月にはこの「丹波篠山の黒大豆栽培」が日本農業遺産の認定を受けました。

丹波篠山で黒大豆栽培が行われたのは江戸時代のことです。元来、雨が少なく、全ての水田で米を作ることができなかったこの地域では、あえて稲作をしない「犠牲田」を設け、そこで年貢米に代わって、黒大豆栽培を行うようになりました。

それからおよそ300年の月日が経過しましたが、今でも市内の農家の半数が黒大豆を栽培

黒大豆は家族単位での栽培が主流です。今回の認定でその価値が認められたことに大きな意義を感じています。



酒井 隆明  
丹波篠山市長(兵庫県)

しています。さらに、山の木々や落ち葉などを燃やして肥料とする灰小屋も多数残っており、懐かしい農村風景が根付いています。また、農地に水を引くためのため池には希少な両生類が生息するなど、生物多様性も保全されています。優良な種子の生産も持続的に行いながら、昔ながらの農法で黒大豆を栽培することで、豊かな農村環境が維持されているのです。

黒大豆は、生産者だけでなく、市民にとっても地域の誇りそのものです。今回、日本農業遺産の認定を受けたことで、まち全体が活気にあふれています。

**大城** 八幡浜市を含む、愛媛県の南西部に位置する南予地域は、宇和海に面したリアス式海岸と山々が連なる自然豊かな地域です。一方で、平地が少なく大半が急傾斜地という、農業には極めて厳しい地形条件にありましたが、この悪条件を克服し、日本有数のかんきつ産地をつくり上げた独自の「愛媛・南予の柑橘農業システム」が評価され、平成31年2月、日本農業遺産に認定されました。

特徴の一つは、海岸線一帯の傾斜地に石積みを用いた、かんきつの段々畑が築かれていること。太陽の直射光、海からの反射光、段々畑の石段の輻射熱の「三つの太陽」の恵みを十分に受けることができ、品質の高い、おいしいかんきつが育ちます。

また、地域の小規模農家が「共選(共同選果部会)」と呼ばれる組織を形成し、「選果」「生産」「販売」を共同で行うなど、戦略的な産地づくりを進めています。このような生産者同士の絆を土台に、多種多様なブランドかんきつが生み出されており、地域全体で200億円超という、高い収益を確保しています。

日本農業遺産の認定は、この地域で育まれた独自の農業システムの価値を、地域内外に広く伝える良い機会となりました。今後もこの日本を代表するかんきつ産地を守り、次世代へつなげていきたいと考えています。

**高橋** 日南市は古くから漁業が盛んに営まれてきた地域です。中でもかつお一本釣り漁業は、



近年、地域の特産品として人気が高まっている黒枝豆の畑(丹波篠山市)

江戸時代からこの地で行われてきた伝統的な漁法で、今でも近海かつお一本釣り漁業の漁獲量は27年連続で日本一を記録しています。加えて、漁師町ならではの食文化が形成されているほか、神話や伝承を含め、漁業にまつわる伝統や文化が息づいています。

令和3年2月、この「日南かつお一本釣り漁業」が日本農業遺産に認定され、多くのメディアでも取り上げていただきました。認定前から、かつお船への乗船体験ツアーなどの誘客活動、大消費地である東京でのPRイベントをはじめとした全国プロモーション活動などを推進してきました。今後も地域の関係団体で組織した「日本農業遺産日南かつお一本釣り漁業保全



地域の素晴らしさや独自性を  
実感できる機会をつくろうと  
児童生徒向けに遺産地域の  
バスツアーを実施しています。

大城 一郎  
八幡浜市長(愛媛県)

推進協議会」を中心に、この漁業を通じた地域振興や、関連する伝統文化の継承、自然環境の保全などに、幅広く取り組んでいく予定です。課題も山積しています。魚価安に加え、燃料高騰なども影響し、25年前に46隻あったかつお船は今や23隻と半減してしまいました。慢性的な人材不足で、担い手確保にも課題を抱えています。将来を見据えると、非常に厳しい状況に

置かれているのも事実ですが、伝統あるこの漁業を将来に継承していかなければいけません。消費拡大のためのPRはもとより、国や県への支援の要望を含め、積極的に取り組みを進めていかなければならないと考えています。

### 次世代への継承に向けた課題

**細野** 効果的に地域振興を進めるためには「人物、金」の資源をうまく活用することが求められます。各都市では、農業遺産を生かしたまちづくりを行うに当たって、どの資源に課題を抱え、どのような工夫で解決を図ろうとされているのか、お話しいただきたいと思っています。

**泉谷** 先ほど申し上げた通り、珠洲市の最大の課題は人口減少です。たとえ人口が大幅に増えなくても、地域の中に人材が充実していれば未来は開けていくと信じています。その観点から、金沢大学と連携して人材育成事業を進めてきましたが、SDGs 未来都市に選定されたのを機に、地域課題を解決するためのワンストップ窓口として、「能登SDGsラボ」を新たに開設しました。人材育成事業の修了生、大学、企業、金融機関、行政など、多様な主体が連携し、

1次製品の付加価値向上や新たな商品開発などを進めていくための拠点です。地方都市ならではの新たなビジネスチャンスを創出し、若者の地域内定着も図っていきたくと考えています。

**酒井** 人口が減少する中で、農村を維持し、持続可能な農業を築いていくためにも、やはり「人」は重要ですね。生産者の高齢化も進んでいますが、日本農業遺産の認定は、生産者の皆さんが、ご自身のなりわいに誇りを持ち、生産意欲を高める契機になったのではないかと思います。



宇和海沿岸一帯の傾斜地を切り開いて造成されたかんきつのだんご畑(八幡浜市)

ます。また、今回の認定で、「家族農業」が高く評価されたことにも大きな意義を感じています。黒大豆栽培は、国が進める大規模化や機械化になりませんが、家族を単位とする小規模農業で、手間暇掛けて栽培するからこそ、おいしい黒大豆が生産できます。その価値を認めていただいたのだから、国や県にはこうした家族農業の維持につながるような政策・支援を期待したいですね。

**高橋** 日南市でも近海かつお一本釣り漁業の担い手不足が深刻です。約25年前から外国人技能実習生を迎え入れてきましたが、コロナ禍の影響で、外国からの入国が厳しく制限され、その

かつお一本釣り漁業は  
海洋資源の保全を優先した漁業。  
SDGsの理念に合致していることを  
広く訴えていきたい。

高橋 透  
日南市長(宮崎県)



対策がまさに喫緊の課題となっています。言うまでもないことですが、担い手不足の要因は魚価安にもあります。もうかる漁業にしていかなければ、根本的な問題解消につながりません。豊かな漁村を将来に残すためにも、魚価を安定させる政策が必要だと思います。

**大城** 農業の持続可能性を高めるためには、子どもたちへの教育も欠かせません。八幡浜市では市内の児童・生徒向けに、遺産地域のバスツアーを開催して、自分たちが暮らす地域の素晴らしさや独自性を実感できる機会をつくっています。また、全国に誇るかんきつ産地であることを広くアピールするためにも、都会の高校生を対象とした修学旅行の受け入れも積極的に進めています。

**高橋** 今後を見据えると、若い世代への働き掛けは非常に重要ですね。日南市でも漁協の女性部が地域の小中学校でかつおのさばき方教室を開催するなど、かつお食の浸透に取り組んでいます。

**農業遺産の効果的な活用に向けて**

**泉谷** 珠洲市では、地域内での人材育成に注力する一方で、移住・定住施策にも力を入れています。市外から、多くの人を呼び込むためには、珠洲市自体に魅力がないといけません。そこで、豊かな里山里海の魅力を「アート」の力で広く発信するため、平成29年から「奥能登国際芸術祭」を開催し、多くの方にお越しいただきました。第1回の開催以来、移住相談件数が急増し、新たに市内に移住する人も増えるなど、早速効果が出ています。うれしいことに、本年度の上半期に至っては、いよいよ転入者数が転出者数を上回る、転入超過となりました。

**大城** 八幡浜市でも、地域で生産されるかんきつが高い収益を確保していることもあり、Uターン、Iターンが増えています。さらに、日本農業遺産への認定後の新たな取り組みとして、令和元年から世界最大級のマーメイドコ



かつお一本釣り漁船の乗船体験ツアーの様子(日南市)

ンテストの日本大会を八幡浜市で開いています。今後も回数を重ねて、「マーメイドといえば八幡浜市」といわれるぐらいの大会に育て、八幡浜市の知名度も向上させていきたいですね。もちろん、市内でもかんきつを生かした6次産業化に、さらに力を入れていくつもりです。  
**酒井** 丹波篠山市でも、黒大豆の植え付けや収穫など、季節に合わせた農業体験を積極的に行っています。都市部からも多くの方が参加されるなど、人気が高まっています。また、黒大豆を使った加工品の開発にも取り組んでいます。  
**高橋** 日南市でも加工品の生産・販売はもとより、ご当地グルメの開発にも取り組んでいます。新鮮なかつおを七輪しちりんであぶって食べる「日

南一本釣りカツオ炙り重」は特に人気で、市内の10店舗で年間2万食以上が販売されています。

## 農林水産業を通して、地域の自然環境を守る

**細野** 国を挙げて脱炭素社会の実現が目指されています。伝統的な農林水産業を営む地域として、これからの環境保全に対する考え方をお聞かせください。

**泉谷** カーボンニュートラルの視点を含め、世界農業遺産に認定された美しい里山里海の環境をどのように守っていくのか。大きな課題ですが、私はSDGsの視点を取り入れたまちづくりの推進が重要だと考えています。

もちろん、珠洲市が進める「能登SDGsラボ」の取り組みが、温室効果ガスの削減などに直接結びつくわけではありません。しかし、環境と社会と経済をうまく結び付けたまちづくりを進めることで、環境保全と地域活性化を両立できると考えています。今後も、「世界農業遺産」×「SDGs」×「アート」のまちづくりを展開して、珠洲市の最大の課題である人口減少問題を解決し、地域の総合力を高めていきたいです。



細野 助博  
中央大学名誉教授

すね。

**酒井** 私は黒大豆栽培のみを次世代に引き継げばよいと考えているわけではありません。栽培を通して、これまで培われてきた農村風景や自然環境を継承していくことが大切だと考えています。近年は水路を造るにしても、コンクリートで固めてしまう方法が採られがちですが、それでは生物多様性は保全されません。まして、農地やため池には、災害を未然に防止する機能もありますから、なおさら、昔ながらの農業システムに裏打ちされた自然環境を守っていかねければならないと考えています。

**大城** 市内のかんきつ園地の周辺では、絶滅危惧種のニホンイシガメが多数発見されています。コンクリートではない石積み環境は、多くの生き物にとっても格好の生息空間なのでしよう。生物多様性を守るためにも、伝統的な農業システムを継承していくことが大切です。

加えて、近年、かんきつの産地として危惧を感じるのは、異常気象が頻繁に見られるようになったことです。太陽の光が十分に当たる8月はかんきつが熟す上で重要な時期ですが、集中豪雨の発生が増えています。そうした実態を、私たち農業遺産の認定を受けた地域から発信していくことも重要ではないでしょうか。

**高橋** 近海かつお一本釣り漁業は、魚群の2割程度しか漁獲しない、海洋資源を守ることを優先した漁業で、まさにSDGsの理念にも合致します。このことも広く訴えていかなければいけません。

さらに、この漁業は、山の恵みとも深い関係があります。この地域では江戸時代から飢肥杉の造林が行われてきましたが、その管理された

杉林から栄養塩が海に流れ出し、豊かな漁場が形成されていきました。また、かつお船もかつては、この飢肥杉が造船材として用いられた。かつお一本釣り漁業を通じて、海と森が有機的につながり、地域の自然環境が守られてきたのです。こうした点からも、この伝統漁業を絶やすことがないよう、しっかりと盛り立てていかなければいけないと考えています。

**細野** 各市長のお話をお聞きして、それぞれの農業遺産が地域の暮らしや産業はもとより、山と海の自然同士、自然と人、そして人同士とといった多様なつながりなども密接に関係していることがよく分かりました。



人口減少時代の中で、いかにして自然環境にも配慮しながら、それぞれの農業遺産を次世代につなげていくのか。経済的な支えも含めて、考えていかなければいけません。難しい課題ですが、ぜひ、地域が一体となって取り組みを進めていただきたいと思います。本日はありがとうございました。

(令和3年11月8日、WEB会議形式にて開催)  
本コーナーは隔月掲載となります。次回は3月号に掲載予定です。